

カルシユの足跡を追って

◇9◇

若松 秀俊

ここで、この物語のもまだった。フリーデン・プラッとなった、筆者とカルシユ博士との出会いの奇縁を述べてみたい。

一九九九(平成十一)年の九月五日朝の出来事がすべての始まりであった。おそら、このことがなかったなら、カルシユ博士のことは人知れず自然消滅していたであろうと、高齢の関係者の誰もが口をそろえて後に筆者に語っている。

それは、ドイツ、シュトゥットガルトの小さなホテルでの出来事から始

まった。フリーデン・プラツ(広場)に面したホテル・アム・フリーデン・プラツで、筆者がフリーデルンと偶然に出会ったことがすべての発端である。

出会い

(上)

さて、問題の偶然のその日の朝のこと、仕事の準備もあって七時ごろであつたらうか、階下の

幾重にも重なった偶然

ダイニングルームで空欄

のことが日本語で語り合っ

た。気がついてそのわけを懐かしく感じて、自然に

別れた。そのとき、低解

たことはいえ、出会いには偶然が幾重にも重なっていた。

工大の高原健爾博士らとていつか、彼女がふと尋ねると、大部分は忘れそうだったとのことであ

た。気がついてそのわけを懐かしく感じて、自然に別れた。そのとき、低解

たことはいえ、出会いには偶然が幾重にも重なっていた。

たことはいえ、出会いには偶然が幾重にも重なっていた。



ホテル・アム・フリーデン・プラツ

た。気がついてそのわけを懐かしく感じて、自然に別れた。そのとき、低解

たことはいえ、出会いには偶然が幾重にも重なっていた。

たことはいえ、出会いには偶然が幾重にも重なっていた。

彼女が宗教の街のマーブルクに在住の、地理学と政治学を専門とするフリーデルン・クリスタ・カルシユ博士であることが分かった。松江、横浜、東京、軽井沢での懐かしいかつての暮らしを、かみしめるように語ってくれた。そして話題は、父フリッツが一九二五年から三九年まで旧制松江高等学校で教鞭を執っていたことへと、順に進展していった。

しかし、残念ながら筆者らの出発の時間も迫る、再会を期して写真の撮り、住所をうかがって別れた。そのとき、低解

像度設定のままのデジカメで写真を撮ったので、帰国後その出来映えを見てちょっと悔んだが、もはや後の祭りであった。フリーデルンに送ったところ、返事にカルシユ博士の履歴と業績の概略が届いた。戦中、戦後の混乱時に紛れて彼の業績が散逸し、日本では十分に時間がとれず、その後ドイツに戻る機会があつてもなおまとめるに十分ではなかったことが、その一面から推測された。しかしながら、この時点で調査のすべての出発点そのものであった。これ以外にカルシユ博士を知るものは、カルシユ博士が、また生徒とのかかわり合いも分からず、推測の域を出ることではなかった。

(東京医科歯科大学大学院教授)